図書館員のひみつの本棚　第７３回

　初夏の陽気が続いていますが、G.W には海まで行かれた方もいるのではないでしょうか？今月は幼少期を瀬戸内海で過ごした著者の海の物語をご紹介します。

『海のしろうま』
山下　明生／作　長　新太／絵　理論社　１９８０年　１３６５円　よみもの
＜お勧め年齢＞
幼稚園☆☆☆　小低学年★☆☆　小中学年★★★　小高学年★☆☆　中学生☆☆☆
高校☆☆☆　一般☆☆☆
（★が多い年齢の子どもにお勧めです。）

＜本の紹介＞
　「今ごろは、遠い　おきの海を、しろうまが　とびよるじゃろう。」
　あらしの前のよる、りょうしのじいちゃんとふたりでくらすぼくに、だいすきなじいちゃんはおしえてくれた。
　ぼくはあらしの海をかける海のしろうまにあいたいと思う。すると、ある日、しろうまが白い犬のすがたでぼくのまえにあらわれた。その犬を「しろ」となづけ、ともだちになったぼく。でもじいちゃんはしんじてくれない。なんとかしんじてほしいぼくは、しろをじいちゃんに見せようとするが、ちょうどあらしがおこり、じいちゃんの船がなかなかかえってこない。心配で泣きながらねむるぼくの顔にあたたかいいきがかかった。しろうまがやってきたのだ。今度はちゃんと馬のすがたで。

＜子どもに手渡すときのポイント＞
　短い作品ですが、著者自身が「海への恋歌」とあとがきに書いているように、海を身近に知る人だけが書ける海への思いがつまった物語です。読み終わった後、カバー見開きにあるまどみちお氏の「海のしろうま　によせる」という詩も子どもたちに紹介してほしいと思います。また、ブックトークなどで紹介される場合は長新太さんの挿絵もぜひ見せてあげてください。

このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。

子ども図書館　重村　さやか